

長瀬 隆

トリウム原子炉革命

古川和男・ヒロシマからの出発

トリウム原子炉革命

古川和男・ヒロシマからの出発

長瀬 隆

不毛な対立を
超える
第三の道!

ゆにっと Books

展望社

ISBN978-4-80640-284-9
C0030 ¥1700E
定価 (本体 1700円+税)
発行：小石川ユニット
発売：展望社



古川博士はヒロシマ・ナガサキの禁忌の声を聴き、トリウム原子炉の開発に向かい生涯をこれに捧げた。著者夫妻は私の年来の友人・同志であり、夫人は古川氏の幼馴染と聞く。「博士の遺言に耳傾けよ」と説いているが、私もまたこれに従うのである。

吉田嘉清 (日本原水協元代表理事)

脱原発か？
再稼働か？

プルトニウムの消滅処理をしながら、平和で安全な原子力エネルギーに転換させる道がここにある！——渾身の書

拙著「トリウム原子炉革命」への推薦文をめぐって
長瀬隆

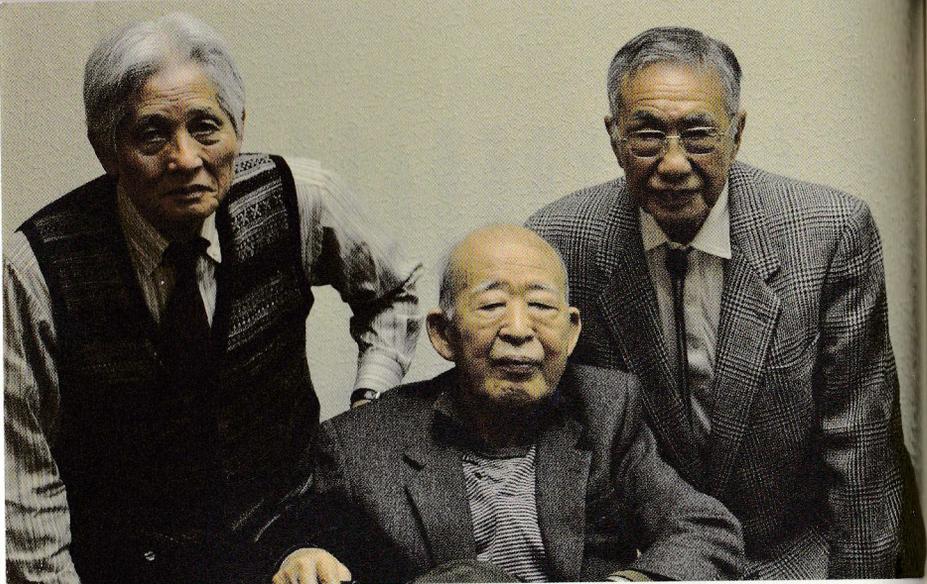
現行の原発はそのほとんどすべてが、炉内にプルトニウムを副産物として出すウランを燃料としています。これは原爆製造時に知られていたことで、広島にウラン爆弾を投下した後、長崎に投下したのがこのプルトニウム爆弾でして、性質の異なるこちらの効果を知らなかったためでした。結果はほぼ同じでした。いずれも核分裂を利用したエネルギーの取得ですが、それを可能ならしめる物質には他にトリウムがあつて、こちらはなぜかプルトニウムをほとんど出さず（1千分の1と推定）、かつ資源が偏って産せず、世界中に広く分布し、従って非軍事的な発電にはこちらのほうが優れていることも知られていました。

わが国では古川和男氏がまだ雑誌論文の段階に在った1959年にこのトリウム熔融塩炉の長所に気づき、最も早く米オークリッジ研究所を訪ね、実験の成功を確認しました。そして米国の研究を引き継ぎ、80年には加速器増殖炉を發明。85年には燃料自給自足型原発FUII（不二）を發明し、以後これの実用化に励みました。

私の妻は広島で原爆に遭っておりますが、生まれ育ちは大分市でして、古川家とはごく近所でした。しかし同家は戦後数年して大分を去っていました。89年に私が2冊目の小説、妻が主人公の「ヒロシマまでの長い道」を上梓した年、古川氏の弟の雅章氏が拙宅を訪ね、その際に和男氏の研究を聞きました。99年には当の和男氏が弟とともに見え、私は不在だったので、妻はその学説を直接に聞いております。2年後の2001年、和男氏は一般向けのものとしては初めての「『原発』革命」を文春新書として上梓しました。

原爆といえば、人は広島・長崎を想うわけですが、私の場合は生まれ育った樺太（現サハリン）であつて、それというのものもソ連占領下で再開された中学校の最初の授業での数学の教師の原爆の強烈な印象のゆえなのです。この人は私の最初の恩師でした。やがて引き揚げて進学した早稲田大で、私は2人目の恩師松尾隆氏に出会うことになりました。

英文科の出身で付属の高等学院の英語の教師となり、しかしロシア文學とくにドストエフスキーへの傾斜を強め、木寺黎二のペンネームで「ドストエフスキー文献考」その他を著わしました。戦後は本名に戻り、平和運動とマルクス主義の啓蒙活動に従事、1956年に49歳で没。早大隈小講堂で常任理事だった日本平和委員会と日本ロシア文學会共催の



左から、山村茂雄さん、和田陽一さん、長瀬隆さん

「にとって、妻への到着はヒロシマへの到着でした。ところがそれは古川博士への到着でもありません。髪が全部抜け落ち、顔の皮膚は一度つると剥け落ち、火傷と打撲のために被爆翌日から起立不能となり、戸坂（現・広島市安佐南区）の収容所に留め置かれ、ようやく11月になって実父に背負われて宇品港から船で大分市に帰還した彼女。これを古川氏は見ていたのです。これが氏の学問の原点であり、拙著の副題に反映することにもなりました。吉田さんはこのネーミングを当初から褒めてくれました。（ながせ・たかし）作家、ロシア文学者）」

葬儀が営まれ、親交のあった古在由重と宮本顕治の両氏がとくに注目すべき弔辞を読みあげました。86年、松尾教授の没後30年を記念し、多数の執筆による文集が刊行され、偲ぶ会の集まりがもたれました。吉田嘉清さんの司会のもと、古在氏を冒頭のスピーカーに据えてはじめられましたが、出席者の念頭には84年の日本原水協での「紛争」があり、全員が「松尾隆が存命だったらこれにどう対処しただろうか」と思っていました。

さて、古川和男氏の「『原発』革命」は、2011年の福島原発事故の2カ月後に「原発安全革命」と名を変え、改訂されて再版されました。以来私は氏の主催するNPO法人トリウム熔融塩国際フォーラムと接触するようになり、その研究会の常連となりつつ、一書を企画執筆することになりました。それが仕上がり、「トリウム原子炉革命」との題名で、「古川和男・ヒロシマからの出発」を副題とする著書として14年8月、展望社から出しました。それに先立つ同年春、私は吉田さん宅を訪ねました。自宅で転倒して骨折し、退院して間もないことを知りつつ、本の帯に推薦の言葉をお願いしました。吉田さんは私が持参した案文に若干の訂正を加え、同意のサインをしてくださいました。

私は私なりに「ヒロシマとは何か」を追求してきました。樺太引揚者という故郷喪失者

るといふ気分だった。ある年の大会のキー・パーソンの一人がThe Bulletin of the Atomic Scientistsの編集長であるMITのBernard Feld教授だった。彼が各地で講演した中で、何度か東京での通訳をさせて頂いた。MITという親近感もあったと思うのだが、彼の講演は自然に日本語に変わっていった。サンケイホールでの講演の後だったと思うのだが、吉田嘉清さんがわざわざ通訳ブースまで来て「完璧な通訳だった」と言ってくれた。ようやく、原水爆禁止世界大会からの「卒業」証書が頂けたと思った記憶が鮮明に残っている。

時間の経つのは早い。その後も、核兵器廃絶運動の様々な場面で吉田さんにお会いした。大変忙しい中でも、吉田さんが昔と同じように気配りをして下さりつつも、ちゃんとした仕事をしているのかを厳しくチェックして下さっていた。これほどの長い間、吉田学校の生徒としての御指導を頂けたことに心から感謝している。

出来ることなら、私たちより上の世代が吉田さんを囲んで、昔取った杵柄を今、再度生かして、核兵器の廃絶のための大きなうねり創りのために働けないものだろうか。

(あきば・ただとし 元広島市長、元衆議院議員)

核の平和利用を問い直す
加戸靖史

2014年7月、かつての原水爆禁止運動について話を伺おうと、吉田さん方を訪ねた。

1954年のビキニ水爆実験を機にわきおこった日本の原水禁運動が、核の軍事利用を禁じるよう強く訴える一方で、平和利用を容認する立場をとってきたことは広く知られている。運動は60年代にひとたび分裂し、77年に「統一」の方向で合意するが、平和利用を認めるか否定するかが、二つの勢力の間で大きな論点となった。

東京電力福島第一原発事故後、「被爆国である日本がなぜ、原発大国になったか」という疑問がクローズアップされた。新たな核被害を経験し、私たち日本人は今後、核とどう向き合えばいいのか。戦後70年を前に、新聞紙面で問い直す企画を考えた。

では、日本でもっとも早い時期から核問題に取り組んできた原水禁運動の関係者が、平和利用をどう考えていたのか。当時を知らない世代として、ぜひともその「空気」に触れ

たい。それが、吉田さんに取材をお願いした最大の理由だった。

私が真っ先にお尋ねしたのは、77年5月、原水爆禁止日本協議会（原水協）の草野信男理事長と、原水爆禁止日本国民会議（原水禁）の森瀧市郎代表委員が電撃会談してまとめた「5・19合意」についてだった。

広島で被爆し、原水禁運動をリードし続けてきた哲学者の森瀧は70年代、「核絶対否定」という思想を打ち出す。これまで容認してきた平和利用をも含め、「核と人類は共存できない」と宣言するものだった。

原水協・原水禁に分かれて開催されてきた原水爆禁止世界大会を統一することを柱にした「5・19合意」には、「（原水協・原水禁が）核兵器絶対否定の道とともに歩むことを決意する」との一文がある。森瀧がこだわった「核絶対否定」ではなく、「核兵器絶対否定」となったのはなぜか。原水協側の一員として、森瀧と草野の会談に立ち会った吉田さんに聞きたかった。

吉田さんの記憶は鮮明だった。「（合意の）文章は、森瀧さんが言ったまま。そのときは『核絶対否定』ですよ」だが（原水協の背後にいる）共産党が猛烈に反対した。『核絶

対否定』をとってくれと」。交渉にあたっていた関係者の間では、このままでは合意できなくなる、との危機感が強まった。「そこで、『核兵器絶対否定』とした。草野さんの知恵ですよ。それを受け入れた森瀧にも決断力があつた」

共産党側が「核絶対否定」に拒否反応を示した理由の一つとして、吉田さんは、原研労組の存在を挙げた。平和利用を手がけた日本原子力研究所（現・日本原子力研究開発機構）の研究員らが構成員だ。「職業を奪われるわけにいかなかったのでしょうか」

ひとたび「統一」に成功した原水禁世界大会でも、平和利用の問題は常に激しい論争となった。原水協側は「平和利用を否定するのは科学の否定だ」と主張した。「あの恐ろしい核兵器（の力）を、よい方向にもっていけばいいじゃないか」という意見は相当の説得力があつた」と吉田さんは振り返った。

「核の平和利用は、民衆に幸せをもたらすという考え方がありませんか。高木仁三郎や池山重朗ら、平和利用に強く反対した人たちが、基本的に原発反対と核兵器廃絶は別の流れのグループ。だから議論が深まらなかった」

「そこが日本の運動の不幸ですけどね」と、吉田さんは続けた。「両方とも相当に盛り

上がるんですけどね、共闘や交流がほとんどない。だから核絶対否定の運動も（国民全体には）広がらなかった。福島（事故）が起きるまでは」

90年、欧州で開かれた反核の大会に参加した吉田さんはショックを受けたという。「平和利用反対の運動家と核兵器反対の運動家がふううに交流し、一緒に行動している。進んでいるなあ、と思いました」。一方、日本の運動ではセクシヨナリズムが幅をきかせている。「福島（事故）で変わったんですかね？」

90年代以降、バルト3国のチェルノブイリ原発事故被災者の支援も続けてきた吉田さん。福島事故後のいま、「日本は核の平和利用を続けるべきか」と聞いた。

「いやあ、続けるべきだとは思いませんね。無理がありません」。もつとも気になるのは「トイレなきマンション」と形容される放射性廃棄物の問題だ。「結局はどこかに押しつけるんですからね。やはり（原発には）頼るべきじゃないと思います」

「本当はチェルノブイリのときに、日本ももつと考えるべきだったんでしょうが」と吉田さんはつぶやいた。

取材は2時間を超えた。安井郁、新村猛、古在由重、陸井三郎、**武谷三男**、坂田昌一、

吉野源三郎、三宅泰雄、猿橋勝子、藤居平一……。私がノートに記した名前はいずれも、日本の反核・平和運動を彩った人々だ。次から次にエピソードが飛び出し、話は何度も脱線したが、興趣は尽きなかった。やはり「生き証人」の言葉には魅力がある。

実をいうと、この取材成果は記事にならなかった。企画の全体構成と紙幅の都合だったのだが、吉田さんには本当に申し訳ないことをした。

ただ、核兵器に反対してきた原水禁運動の関係者たちでさえ、平和利用の問題では最後まで一致することができなかったという現実は、脱原発か、原発依存かの選択で揺れるいまの日本にとって示唆に富んでいる。今回、こういう機会に吉田さんの言葉をご紹介できたことで、多少なりとも罪滅ぼしができたら幸いである。

（かど・やすふみ 朝日新聞論説委員）

故・森瀧市郎さん(左)と故・草野信男さん(朝日新聞社)

